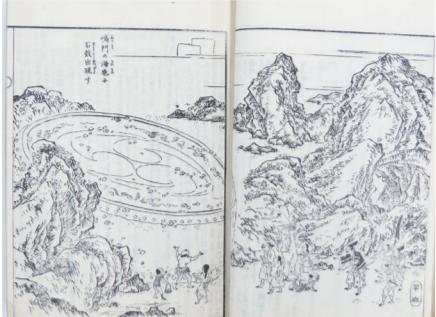


● 絵画

鳴門海峡の渦潮は、歌川広重や葛飾北斎など時代を代表する浮世絵師によって、迫力ある絵画として描かれています。大毛島から海峡を淡路島方向に望む構図が定型化されていることから、18世紀末頃には、鳴門海峡の風景が絵画史的に「名所」とされ、江戸等の絵師達にもその景観美の情報が届いていたようです。



阿波鳴門の風波



淡路国名所図会

● 古代～中世の文学等

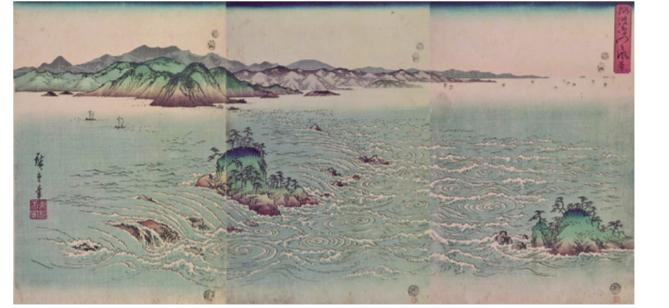
8世紀初めに成立した『日本書紀』では、「粟門（あわのと）」として潮の流れが速いことが表現されています。鎌倉時代に成立した『平家物語』や平家物語に加筆して読み物として作られた『源平盛衰記』では、平通盛の妻である小宰相局のエピソードが描かれ、鳴門町土佐泊には、「小宰相局の墓」が地元の人により建立されています。

また、室町時代に成立した『太平記』では、「澳の塩合いに大きな穴の底の見えぬが出でて（略）」「この鳴門と申すは、竜宮城の東門に当たつて候ふ間（略）」など、鳴門海峡の渦の様子がはっきりと描写されています。

芸術・文化

鳴門海峡の渦潮は、『古事記』『日本書紀』の神話の舞台となっています。古代から現代まで、文学作品や詩歌の題材として表現されている例も数多く見受けられます。

特に、近世以降には、歌川広重、葛飾北斎の木版画を含む、多くの絵画に風景として描かれています。



阿波鳴門之風景（歌川広重）

観光・往来

「観潮」は、春の季語として特に鳴門海峡の渦潮を見物することと定義づけられるなど、鳴門固有の文化となっています。観潮が行われ始めた近世から現代に至るまで、様々な人々が形を変えながら鳴門海峡の渦潮を観賞してきました。



皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）が観潮で乗船された「徳島藩御召鯨船千山丸」

人々の暮らし

鳴門海峡周辺は、古代より製塩が行われてきました。現代においてもこの地で製塩が行われ、製塩に起源を持つ製薬業もこの地域の代表的産業です。鳴門海峡の恵みであるワカメや鰯を人々は様々な工夫を凝らして採取し、その名を全国に轟かせてきました。



昭和39年頃の天然ワカメ採取の様子



鳴門海峡の渦潮

～文化編～

文化遺産ガイドマップ

発行 兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会

協力 鳴門市第一中学校美術部



観光・往来

● 観光

渦を見るために鳴門に行く、という「観潮（かんちょう）」が行われ始めたのは、近世からといわれています。徳島藩主の蜂須賀氏は観潮のために、大毛島の孫崎付近に茶屋を建てたといい、それが現在のお茶園展望台という名称につながっています。



お茶園展望台からの眺望



阿波名所図会

明治時代末期までは、鳴門は公園などの整備がなされず、交通手段が汽船に限られており、様々な規制があったため、容易に観光に行くことはできませんでした。1900（明治33）年以降の皇室の方々の観潮を通じて、鳴門は名勝地・観光地としての知名度を大きく上げるとともに、交通網が整備され、観光地として発展してきました。

人々の暮らし

● 漁業

鳴門のワカメは、鳴門海峡で育まれる海の恵みの一つであり、鳴門市の特産品の一つとなっています。鳴門のワカメに関する最も古い記述は、奈良時代の「平城宮跡出土土木簡」にあり、牟屋（撫養）海でとれたワカメが奈良の都に献納されていたことがわかります。

鳴門海峡で育った鰯は激しい潮流で身が引き締まり、絶品として全国に知られています。江戸時代中期に記された書物である『本朝食鑑』には、鳴門海峡を乗り越えた鰯には「鳴門骨」と呼ばれる瘤（こぶ）ができると紹介されています。

速い潮流に生息するワカメを採取したり、鳴門鰯の漁を行うために、「カンコ舟」や「テグス」、「一本釣り」など、漁法や漁具に工夫を凝らして漁を行ってきました。



カンコ舟



入浜塩田の様子

● 製塩業

鳴門海峡周辺では古来より製塩が行われてきました。鳴門市内にある古墳時代の遺跡からは、大量の製塩土器が出土しています。近世には、鳴門において塩田が大規模に開発され、鳴門で産出された塩は「斎田塩」と呼ばれ、優れた質と量で全国で名声を博しました。入浜塩田に使用された用具は、「鳴門の製塩用具」として、国重要有形民俗文化財に指定されています。

現代の鳴門市的主要産業の一つである製薬業も製塩の過程で発生する「にがり」に起源を持つもので、製塩業と関係が深いものです。

こぼれ話

●『古事記』国生み神話のモチーフ？

鳴門海峡の渦潮は、8世紀に編さんされた我が国最古の歴史書『古事記』で、イザナギ、イザナミが天から矛で海をかき回し淡路島他の島を生んだとする国生み神話のモチーフになったとする説があります。



「天之瓊矛を以て滄海を探るの図」



ドイツ兵達の遠足の様子

● ドイツ兵達も渦潮を見に行った？

捕虜への人道的な処遇を行ったことで知られる「板東俘虜収容所」のドイツ兵達も、1919（大正8）年に鳴門海峡を目指して遠足をしたことが、収容所新聞「ディ・バラッケ」に掲載されています。

● 鳴門海峡（大鳴門）と小鳴門海峡

幼少期を鳴門で過ごした、戦前の日本の労働運動の指導者である賀川豊彦は、晩年、「小鳴門」について新聞に次のように寄稿しています。

『大鳴門は日本の奇觀とされている。その渦はたしかに珍しいものである。しかし、（中略）感じたことは大鳴門に比較して小鳴門が静寂でしかも実に優美であるということである。高島とその隣の小島の作る港湾の一つが、人間の視野に美しく映するものがまことによい。（中略）で、私は、小鳴門の海峡美と、港湾美を日本人が、も少し大鳴門と共に観賞すべきだと思った。（後略）』

● 往來

鳴門海峡は、8世紀に成立した古代国家における五畿七道の「南海道」に位置づけられ、淡路島福良と鳴門市撫養を結ぶ海上路として重要な場所となっていました。平安時代の歌人・紀貫之は、土佐（高知県）から京都までの帰路の際、鳴門市の土佐泊で潮待ちを行ったことが『土佐日記』に記されており、この際に詠んだ歌の歌碑が今も残されています。

現代の鳴門市的主要産業の一つである製薬業も製塩の過程で発生する「にがり」に起源を持つもので、製塩業と関係が深いものです。

令和2年度 鳴門市第一中学校美術部油彩画作品展・出品作品

兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会 <http://naruto-uzushio.jp/>

兵庫県事務局 656-0021 兵庫県洲本市塩屋2-4-5

兵庫県淡路県民局交流渦潮室 電話 0799-26-2014

徳島県事務局 770-8570 徳島県徳島市万代町1-1

徳島県未来創生文化部資源活用課 電話 088-621-3164

